

指導資料

 鹿児島県総合教育センター
令和3年10月発行

外国語 第95号

対象 中学校 義務教育学校
校種 特別支援学校



「使える」にシフトする文法指導の在り方について

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編では、『語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかだけに主眼が置かれるのではなく、外国語を使って何ができるようになるかが大切である。』と示されている。また、全国学力・学習状況調査（平成31年4月実施）での調査問題の作成に当たっても、『基礎的な「知識・技能」を測ることに加え、それらを実際のコミュニケーションの場面においても効果的に使える状況まで活用できる「思考力・判断力・表現力等」も測ることを重視』している。そこで、これらを踏まえ、「使える」にシフトする文法指導及び授業展開例を紹介する。

1 新学習指導要領における目標と課題

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編においては、「外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である。」、「言語の役割として、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面があることに留意し、特に他者とのコミュニケーションに焦点を当てて指導することが重要である。」と述べられている。文法事項の指導は外国語教育の最終的な目標でなく、これらを活用して、生徒にコミュニケーション活動を効果的に行えるようにさせる必要があることを示している。

また、令和元年度の「英語教育実施状況調査」において、中学生、高校生の英語力や言語活動の状況は改善しているとの結果が出て

いる。しかし、授業では依然として、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないことや「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題があるとされている。また、生徒の英語力は改善されているものの、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等にに応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することなどは十分ではないとされている。

2 全国学力・学習状況調査から

平成31年4月に実施された全国学力・学習状況調査でも、従来の「主として『知識』に関する問題」と「主として『活用』に関する問題」に区分するといった出題の仕方が整理され、一体的に調査問題が構成され、次のような問題が多く出題された。

(2) 次の①、②について、例を参考にしながら、必要があれば()内の語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりなどして、それぞれ会話が成り立つように英語を完成させなさい。

(例) <放課後に図書室で>

A: Can you help me now?

B: Sorry. I (do) my homework now.

[答え] am doing

① <朝の通学路で>

A: I watched a baseball game yesterday. It was so exciting.

B: Oh! (like) baseball?

A: Of course. I love playing and watching baseball.

資料 「知識」と「活用」が統合された問題

資料は、英語の基本的な語や文法事項等を理解して、正しく文を書くことができるかどうかをみるため、場面設定があり、会話の流れから時制を判断して、1人称、2人称の英文を書く問題である。正しく文を書くためには、語や文法事項等の知識を活用できる程度に高めておかなければならない。正しい文を書くことで、それらの知識や技能を身に付けているかどうかを把握することをねらいとしている。教師は、基本的な語や文法事項等を理解させるだけでなく、会話の中において実際にその語がどのように使われるかを理解させる必要がある。

指導においては、コミュニケーションの目的や場面、状況のある言語活動において、様々な個別の知識を活用させて文を書かせることを授業の中に位置付けるようにする。また、生徒の誤りについて生徒自身に考えさせるなどの指導を繰り返すことを通して、学習内容の理解を深めさせていく必要がある。

3 内容と言語材料をセットで教える

図(和泉2021)のように第二言語習得の分野では、長い間、言葉の学びには「形式」(form)、「意味」(meaning)、「機能」(function)の3要素が不可欠であり、それらのつながりを学ぶことが必須であるということが言われ

ている。

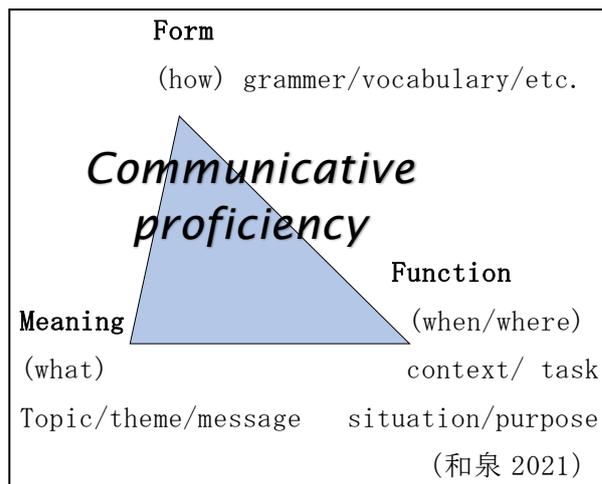


図 言語習得に必須の3要素

「内容」とは、「意味」(meaning)にあたるもので、「目的・場面・状況」とは「機能」(function)にあたるものである。

私たちは日常生活の中で言葉を使う上で、これら3要素を自然に結び付けて使用したり、理解したりしている。例えば、海外のある商店街で友人Aが購入した同じ商品を自分が値切って購入した際、その友人Aが“I should have done that!”と言っているのを聞いて、海外の商店街(目的・場面・状況)「機能」、値切る(トピック、テーマ)「意味」、仮定法(should have + 過去分詞型)「形式」のセットで言語を習得していくようなことである。

和泉(2021)は、「指導に当たっては、私たちは普段このようなことを意識せずに言葉を使っているが、それぞれを授業に生かすためには日頃からの言語使用の実態についてアンテナを高く張っておくことが必要であろう。」と述べている。

使える文法指導を考える際、教師はその導入と活動の両方において、どういった場面で、何の目的のために目標文法項目が使われているかを考えておく必要がある。また、実際の授業では、意味のある文脈の中で目標文法項目を生徒が何度も聞いたり、使ったりする機会を何度も設定し、その目標文法項目の「形式」(規則性)を生徒に気付かせる手立ても大切である。

4 授業実践例

- (1) 教材 新学習指導要領対応 中学校外国語教材『Bridge』
- (2) 単元 A Time Machine
- (3) 授業の実際

(本文)

エミリーとケイスケはタイムマシンについて話しています。



Emily : If we had a time machine, would you use it?

Keisuke : Yes. If I had a time machine, I would go to the future.

I want to see my future family. How about you, Emily?

Emily : If I had one, I would go back to last month. I had an important math test, and I got a terrible score. I wish I could take the test again.

Keisuke : Hahaha!

※ この単元の目標文法項目は仮定法 (If + 主語 + 動詞の過去形, 主語 + would/ should/ could might など + 動詞の原形)

① まず、教材を開本させ、読ませる。

Emily seems to have wild idea(妄想).
Open your textbooks to p.24.
Read it for five minutes.①

(5分後)

If Emily had a time machine,
she would like to go back to last month.③

- ② ペア等で内容を確認させる。
- ③ 教師は教材の内容の簡単な補足説明を行う。

What did you catch?
Please check the contents of the
textbook with each other.②

ペア等で内容確認

Yes, so, she would
take a test again.④

She is funny.

Yes, because she a got terrible
score on the important math
test last month.⑤

④ 次に、教師が教材の内容に関する自分の考えを示す。

The situation with the corona
disaster is not getting better.
If I had a time machine, I would
see the situation one year from
now. (2, 3回ほど繰り返す.)
What do you think, Jyuri?⑥

えーと, Yes.
Hmm . . . See my future⑦

⑤ 生徒が言いたいことを英文にする。

Oh, If you had a time machine,
you would see your future. ⑧

Yes, If you had a time
machine, you would see
your future.⑨

「自分だから you を I に変えて」
(修正)
Can you say that again?⑩

If I had a time machine,
I would see my future.⑪

- ⑥ 教師が示した英文は必ず生徒に復唱させる。
- ⑦ その後、数人の生徒に質問をする。

Kenji, if you had a time machine, what would you do? ⑫

When would you go to? ⑭

Why? ⑯

I see. If you had a time machine, you would go back to two years ago and advice to yourself because you got a terrible scores on all of your test in junior high school. ⑱

If I had a time machine, I would advice to me. ⑬

I would go back to two years ago. ⑮

Because I got terrible scores on every test. ⑰

※ 正確に表現できない生徒には前頁のような教師の支援を繰り返し繰り返し行う。

⑧ 教師が質問し、生徒に答えさせることでまとまりのある文を表現できるようにさせる。

⑨ このようなやり取りを繰り返すことで生徒に仮定法の文の形を気付かせる。

⑩ 教科書の内容の確認が終わったら、仮定法の文の形で気が付いたことを生徒に発表させる。

これまで、もしタイムマシンがあったら、何をしたいか皆さんと話をしたり、教科書の“A Time machine”を読んだりして、事実ではない主観的な想像や仮定の話をしてきましたが、この英文の形で何か気付いたことはありませんか。 ⑲

過去のことを言っているわけではないのに過去の文章になっている気がします。 ⑳

※ 文法事項に関する説明は、文構造が複雑な場合、日本語で行うことも考えられる。

そうだね。事実ではない主観的な想像や仮定の話をするときは、時制を一つ前に戻して表現します。 ㉑

5 「指導→使用」から「チャレンジ→支援」

和泉（2021）は、「教える際には指導と支援の違いを理解して、できるだけ前者から後者へと比重を変えていくことも重要である。」と述べている。「最初に教えてから後で使わせる。」というのが従来型の指導方法であるが、それを否定せずとも、「まずはチャレンジさせて、その後で支援する。」という方法をどんどん試すべきであるということである。導入部分でインプットを与え、必要なら目標文法項目を板書して簡単な説明までするが、詳しい文法解説やドリル練習などは後回しにする。まずは生徒に活動の中で体感させることを優先する。教師の先回りの指導や教え込みではなく、生徒自身が学びの必要性を自ら気付けるように支援していくことが大切である。

こういった支援を重視した授業の利点は、主体的な気付きを促すだけでなく、教師への過度な依存を緩め、学びへの動機付けを高め、自律した学習者を育てることができる。

教師は語彙・文法が実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得されること、「使える」にシフトする文法指導を意識しながら授業改善を図っていきたい。

－ 引用・参考文献 －

- 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』平成29年、開隆堂
- 文部科学省中学校外国語教材『Bridge』令和2年
- 和泉伸一 『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』平成29年、株式会社アルク
- 『英語教育』令和3年、大修館書店

(教科教育研修課 眞正 基道)